

(論文内容の要旨)

本論文は、平安時代から近代までの京都の野を対象として、各時代の文芸に表現された人々の風景に対する評価の歴史的な変遷と、それに関連する地形の空間的特性や景観形成の仕組みを明らかにすることによって、野の風景の発達と持続、およびその要因を解明することを目的としている。本研究は序論と、8章の本論から構成されている。

序論では、研究の背景と目的を述べ、概念と用語の整理を行った。本研究に関連する既往研究のなかでの位置づけを行った。

第1章では、近世以前の文芸に現れる嵯峨野の風景の発達のプロセスについて明らかにした。平安時代の嵯峨野は、平安宮から隠れ籠もったような場所に位置する景勝地であったため、幽閑な隠遁地として選ばれるとともに、霊場としての性格を有するようになり、平安後期から鎌倉時代にかけては出家隠棲の地としてみられるに至った。このような嵯峨野では、詩歌や物語などに、「山里」の景色とその秋や冬の景物、無常を感じる、あはれ深い隠棲の地としての景色が表現された。

第2章では、近世の紀行文に現れる風景記述をもとに、嵯峨野を訪れる人々の風景の鑑賞の仕方を明らかにした。近世の紀行文の風景記述からは、嵯峨野において、眺望や神社仏閣のほか、歌枕・四季、物語・故事、遊びなどの、様々な性質の風景に関する記述がみられたこと、風景の鑑賞の仕方として、主に、イメージの追体験、視覚的風景の観賞、遊び、の3つのパターンがみられたことを示した。また、場所の史実や文学上のイメージ、固有の文学的表現が、人々の風景の鑑賞の仕方を大きく特徴づけていたことを明らかにした。近世の嵯峨野では、人々によるイメージの追体験によって、文学上の表現が実際の景観と結びつけられるに至った。

第3章では、嵯峨野の風景の持続要因としての、近世後期から近代にかけての祇王寺、落柿舎、厭離庵等の名所再興に着目し、その意図と過程について明らかにし、風景資産の創造と継承という観点から評価した。名所の再興においては、文芸などの風景表現を手がかりとした風景づくりが行われていたことを明らかにした。その結果、前近代の景色は、場所の記憶としてのみ残るのではなく、現代においても実際に追体験することのできる環境として継承された。

第4章では、近代以降の嵯峨野の風景の持続性について、風景の見方と物理的環境という2つの側面から評価した。その結果、嵯峨野では、歴史的な風景の見方を継承しながらも、昭和初期に、伝統的名所の枠を超えた自然風景の評価が生まれたことを示した。着目されたのは、野の道、山の道、池辺の道などの、道すがらの風景であった。

(論文内容の要旨)

また、近代以降の嵯峨野の物理的環境の変遷について、土地利用の変遷と、明治の土地後の別荘地や公園の開発、戦後の宅地開発の動向から明らかにした。各時代の風致保全施策は、嵯峨野の歴史的文化的資産とその周囲の自然環境とを一体のものとして保護・保全し、風景の持続に大きな役割を果たしたことを示した。

第5章では、平安京郊外の別業を対象に、地形がつくる空間的特性について、山の仰角と見渡し角度による囲繞性の評価、可視領域からみた領域空間の規模の評価、眺望（見通し）性の評価、を行った結果、多くの別業において、二方向以上を視対象となる山に囲まれていたこと、視覚的な閉鎖空間が形成されていたこと、それと同時に、見通しが得られた可能性があったことを示した。また、別業周囲の地形構造に着目し、地形的囲繞を類型化した結果、遠距離の山並みによる広域囲繞、近距離の山と山並みによる凸型・複合囲繞、③凹状地形と山並みによる凹型・複合囲繞、④谷などによる狭域囲繞の4つに分類できた。平安京周辺部においては、別業を中心とした地形的囲繞空間の連なり構造を有していたことを明らかにした。

第6章では、近世初期の文人山荘における、地形の空間的特性と風景評価の特徴を明らかにした。近世の文人山荘は、隠れ場所としての囲繞性と、眺望性の両者の好条件を満たしている場所が立地場所として選ばれていたことを示した。文人らが嘆賞した景物は様々であった。文人の山荘では、遠くの山並みや野の眺めなどとともに、山の四季の景物や、隣接する里や森・林、谷川などの様々な風景が賞された。眺望の対象は、遠距離の山や野と、中～近距離の山や木々などに大きく分けられ、これは地形を境界とする囲繞された内側と外側の区分にほぼ対応することを示した。

第7章では、京都盆地周縁の山裾地形上の庭園のうち、敷地外の地形が庭園空間の形成や眺望景観の創出に大きく影響を与えている庭園を対象として、眺望景観の特性について明らかにした。その結果、地形による囲繞を補完するような敷地計画による囲繞空間を形成と、視界方向の設定や視界の切り取りによる、敷地規模の数倍の規模の眺望空間の創出について明らかにした。さらに、同一庭園内の複数の視点場において、囲繞性の強調や、開放性の強調など、異なる性質の眺めが対置されていたことを示した。

第8章は結論であり、本研究で得られた成果について要約し、今後の課題や展望について述べた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、平安時代から近代までの京都の野を対象として、各時代の文芸に表現された人々の風景に対する評価の歴史的な変遷と、それに関連する地形の空間的特性や景観形成の仕組みを明らかにすることによって、野の風景の発達と持続、およびその要因を解明することを試みている。得られた主な成果は次の通りである。

(1) 文芸に現れる風景の発達プロセス

京都嵯峨野を対象に、文芸に現れる野の風景の発達のプロセスについて明らかにした。すなわち、平安時代以降の詩歌や物語等の文芸に現れる風景（隠遁地、聖地、山里等）と見方、近世における紀行文の風景記述に現れる風景と鑑賞の3つの典型（追体験、鑑賞、遊び）、昭和初期の随筆に現れる近代的風景の特徴を抽出した。

(2) 風景表現を契機とした風景づくり

嵯峨野における風景の発達と持続・変容のプロセス、およびその要因を明らかにした。すなわち、嵯峨野における風景の持続性について明らかにするために、持続要因の一つである近世後期から近代にかけての名所・旧跡の再興運動に着目し、文芸などの風景表現を基礎とした風景づくりの創作意図と過程を史的資料に基づいて明らかにした。さらに、当該地域の土地利用の変遷と観光開発の動向から、近代以降の風致保全施策が風景の保全に与えた影響を明らかにした。

(3) 野の地形と景観特性の抽出

文芸に現れる野の風景に代表される平安時代の別業、近世文人の山荘、山裾地形上の古庭園を研究対象として、標高データから作成した3次元地形モデルを援用した、地形構造および眺望景観（可視領域）の分析を行い、地形がつくる囲繞的空間特性の4つの型を抽出し、その景観特性である仰角、水平角、可視範囲を特定することができた。

以上、本論文は、文芸の分析と地形分析に基づき、野の風景の現象解明と風景づくりのあり方を明らかにし、景観工学および都市設計の分野において、新たな知見を与えるものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。